
学 会 記 事

第27回新潟糖尿病談話会

日 時 平成10年4月4日(土)
午後1時30分より
会 場 新潟大学医学部有壬記念館
2階大会議室

I. 一般演題

1) 糖尿病教育入院の効果—HbA1c の追跡調査を通して—

金子 幸枝・渡辺千恵子 (県立がんセンター)
丸山 秀子 (新潟病院西7病棟)

糖尿病の患者は、年々増加傾向にあり、その患者教育の重要性が叫ばれている。

今回私たちは退院後のデータを追跡調査をし、教育入院の効果について判定しようと研究に取り組んだ。患者を糖尿病教育入院をしていた者(72名)をI群とし、外来に6ヶ月以上通院し、糖尿病教育入院をしたことがない患者を無作為に抽出した者(83名)をII群とし、年齢別などをはじめ、いくつかの観点で比較した。その結果は次のようである

○糖尿病教育入院は、血糖コントロールをするにあたって効果があった。

○早期に教育入院をすることが効果的である

○外来での継続した教育が重要である。

今後教育入院が生活にどのように関わっているか、アンケート等で検討をしていきたい。

2) 寝たきり発生ゼロをめざしての住民健康状態調査結果

飯塚 孝子・藤井あきこ (新潟医療生活協同組)
野股麻佐子 (合 木戸病院保健係)

1. 研究目的

脳卒中中で倒れ寝たきりになった人は、高血圧・糖尿病・脳卒中後遺症治療者だったこれらの疾病を防ぐために、生活習慣が高血圧、糖尿病に関与しているか明らかにする

2. 研究方法

新潟市上木戸の生協組合員20才以上を対象に、96年12月に調査用紙を地区役員を通じて587世帯に配布回集した926人分を分析した。

3. 研究結果

①現在の健康状態は、不調が1割で加齢とともに漸増している。受療率は50代から急増7割代の受療率になるのは、男性60代女性80代と性による年齢差があった。高血圧、糖尿病、脳卒中の占める割合は全体で26%いづれも男性>女性である。40代から増加 ②基本検診受診率は57.6%、女性と退職世代が低い。異常所見4割で、30代から漸増 ③20才からの体重増加とともに増える病気は糖尿病、高血圧、高脂血症。体重増加者は不規則食事と間食習慣者の割合が高かった。+5Kg以上の割合は男性>女性 ④残業率夜勤頻度は男性>女性。残業時間月41時間以上になると10時間以下に比べ高血圧・糖尿病・高脂血症の割合が高い。夜勤者は常日勤と比べ高血圧・糖尿病・心臓病・高脂血症が多い。⑤生活習慣で性差があったものは飲酒と喫煙で男性に多かった。

3) OGTT 結果説明 医師診断前の集団指導の取り組み

小柳 純子 (保健婦)(下越病院)

【目的】

- I. 糖尿病患者に限らず『糖尿病』について理解する
- II. 生活を見直すきっかけにする
- III. 医師の新患指導をより効果的に行う

【方法】

・OGTT 実施者(新患)に希望をとり、説明の予予約する

(当日記入して持参するように「問診表」「食事アンケート用紙」渡す)

↓

・OGTT 結果説明

(集団指導 保健婦は火曜日 看護婦は金曜日 1時間)

(体脂肪測定, OGTT 結果返し, 生活面見直し, 糖尿病についてなど)

↓

・栄養指導(栄養士が1時間)

↓

・診察室(診断・方針など)→ 必要時には更に個別指導を指示(後日予約制)

↓

・次回診察予約，又は一年後 OGTT

【結果】

- ① 正常者も含め熱心に指導を受けていた
- ② 糖尿病診断への患者の受け入れはスムーズ
- ③ 診察室での医師の指導は，より効果的で短時間で指導ができるようになった
- ④ 集団指導を組み入れたため，指導数が増えた

4) 眼科外来で行なっている糖尿病患者教育

小川 佳子・斎藤久美子（済生会新潟第二病院）
畑山由比乃・安藤 伸朗（眼科）

目的：糖尿病網膜症の発症および進展の予防には，早期発見や治療と共に患者自身の疾患に対する知識と意識が重要である。これまで内科が主体となり行ってきた糖尿病患者教育を，眼科外来にて行っているため，その効果について報告する。

対象と方法：平成10年1月から眼科外来と入院の糖尿病患者を対象に，外来でのパンフレットによる検査と疾患についての説明，診察時には画像ファイリングシステムを用いた眼底所見の説明，眼科入院の患者に対しては疾患と治療の解説を行ない，さらに内科で行っている糖尿病教室の眼合併症についての教育を分担している。

結果：患者教育を眼科で行なうことは，患者自身が失明に対する警戒感があるため前向きであること，自身の眼底所見を見ることにより疾患の状態を認識できること，入院中の患者では家族とともに教育できること，視覚障害リハビリテーションを早期に導入できる，スタッフの学習意欲が向上するなど利点が多い。

結論：糖尿病患者教育を眼科で行なうことは十分に価値がある。

5) 網膜症の5年間の経過

清水マチ子（舟江病院内科）

92年（男56女66人）97年（男61女62人）に網膜症の実態調査を行い網膜症の進展過程と死亡 転医 合併症 視力低下などの予後調査を行った。92年前増殖 R は34人97年は55人と増加。DM 発見から各病期までの平均年数は単純ですが11.2年 前増殖12.8年 増殖が16.5年であった。又 DM 発見から各病期までの年数の頻度分布をグラフにしてみた。92～97年の間の病期の進展と5年間の平均 HbA1c との関係を検討した。R なし～単純群 HbA1c 7.4% なし～前増殖群 7.9% と

差はあるが有意差はなく，単純～と前増～についても差はほとんど無かった。網膜症の合併症は新生血管緑内障2例 硝子体出血5例 視力低下9例。97年7月までの死亡者は男11 女16人。死因は心疾患6 悪性腫瘍6 腎不全5 自殺事故4 その他7であった。転医者は一般病院へ7 老健施設2 透析病院5。

6) 糖尿病網膜症硝子体手術施行時の全身因子

橋本 昌美・信田 和男（済生会新潟第二病院）
安藤 伸朗（眼科）

糖尿病網膜症に対する硝子体手術成績は年々向上しており，全身管理不良例への適応増加している。今回我々は硝子体手術成績と全身因子の関与について検討した。対象は，96年1月から97年12月までの2年間に初回硝子体手術を施行し3カ月以上経過観察できた107例133眼。術前・最終視力による硝子体手術成績と初回手術施行時の全身因子（年齢糖尿病罹病期間，糖尿病治療法，HbA1c，蛋白尿，神経症，高血圧，虚欠性心疾患，脳血管障害）について検討した。

術前硝子体出血67眼50%，網膜剥離31眼23%で，術後77眼55%に視力改善を認め術後視力0.5以上は，48眼36%であった。また，視力改善不変群105眼と悪化群28眼について，全身諸因子の関与を検討したが，いずれの項目についても有意差は認められず，両間の関与は否定された。しかし今回の検討は手術施行時のみの全身因子であり症例数も少ないことから今後更に検討を要す。

7) 画像ファイリングシステムを利用した糖尿病網膜症管理

安藤 伸朗・橋本 昌美（済生会新潟第二病院）
信田 和男（眼科）

目的：デジタル画像を臨床応用することは，医療界では主流になってきた。しかし実用化にはまだまだ乗り越えなければならない課題も残されている。今回はデジタル画像ファイリングシステム IMAGEnet の臨床応用上の問題点を検討した。

方法：済生会新潟第二病院眼科にて，デジタル医用画像ファイリングシステム IMAGEnet を院内 LAN を用いて診察室・検査室・レーザー室・手術室・病室・医局を繋いだ。入力には眼底カメラ・前眼部撮影装置・手術顕微鏡・ハンフリー視野・自動眼圧測定器等である。JPEG にて画像は圧縮して用いた。画質・転送速度・